

監督退任にあたって

2017年の監督就任以降5年間、100周年あり、コロナ騒動ありと、にぎやかな時期を過ごしました。関東インカレでは2部降格と薄氷を踏む1部復帰も経験しましたし、同志社戦や早慶戦も勝ったり負けたりで、満点の年もなければ零点の年もなく、一喜一憂する年を積み重ねました。

関東インカレに関して言えば、磐石な状態で迎えることもなければ、さりとて全く絶望的ということもなく、毎度ドキドキハラハラでしたが、今にして思えばそれが『慶應らしい』と言えなくもない、監督としての醍醐味の一つだったかもしれません。

元々競技力の高い、強い選手が活躍することも楽しみですが、さほど目立たなかった選手も含め多くの部員が自己記録を更新し、成長する姿を見るのも監督冥利に尽きました。また、選手として活躍する機会はなくとも、純粹にチームのために尽くしてくれるサポートスタッフの姿にも頼もしさを感じられました。監督という立場で身近にいればこそ見えてくる現役部員の活動に対する真摯で懸命な姿を思い出すと、本当に楽しい経験をさせていただいたという感慨を禁じ得ません。

OBOG会としては、何より強いチーム・選手の育成を監督に期待すると思いますが、『親はなくとも子は育つ』ように、競技をするのは選手ですし、部の運営主体も現役の部員たちであり、監督としては『部が逸脱しないように見守る』のが役目と心得て、気楽に臨んできました。

この間、幸い大きな事故もなく任を全うできたことは、現役部員諸君・中澤部長・河添前部長のご協力、コーチ・アドバイザーの献身的な活動支援と、OB・OGの皆さんの物心両面に亘るご支援の賜物であり、誠に感謝に絶えません。ありがとうございました。

この総会を以て、鹿又新監督にバトンパスをするわけですが、大学が入学者選考において競技実績を加味しない限り、これまで同様に強い選手の獲得・育成に苦勞することは想像に難くありません。しかしながら、そうした苦勞の中でも、何とか競技面でプレゼンスを示しつつ、立派な社会人へと学生を育てていくのが、慶應の慶應たる、競走部の競走部たる所以ではないかと考えます。

引き続き鹿又新監督の下、新たなコーチングスタッフ、現役部員たちへの絶大な支援をお願いします。

2022年6月
鈴木岳生